

漢字書字学習における振り返りによる行動調整

－ 振り返り条件の検討 －

○霜田浩信 (群馬大学教育学部) 本間健一 (高崎市立中居小学校)
KEY WORDS: 発達障害 振り返り 漢字書字

I 目的

子どもたちが自らの行動を振り返り、行動を調整するスキルを身に付けることは適切な行動の獲得や行動の改善につながる。特に行動の結果に対して、できた・できなかったと評価するだけでなく、その要因を子ども自らが振り返られるようになることは、目標を達成するための方法を理解し、行動の改善にはつなぐと考えられる。しかし、発達障害の子どもにとっては、自己の行動を客観視して評価することや、行動の要因を振り返りに困難を抱えることがある。そこで、本研究では、漢字書字学習において書字した漢字を振り返る機会を設け、そのなかで振り返りの方法を設定したうえで、対象児が行動の要因を適切に振り返ることができる条件を検討することを目的とする。

II 方法

- 1. 対象児**：指導実施時、通級指導教室に通う小学校4年男児であり、漢字を正しく丁寧に書くことが課題とされた。
- 2. 指導期間**：201X年7月に事前アセスメント、9月～201X+1年3月にかけて1回10分程度の指導を実施した。なお、指導は通級指導教室担当者が行った。
- 3. 漢字書字方法**：漢字書字にはiPadでの漢字書字アプリ(常用漢字筆順辞典FREE)を使用した。書字する漢字見本(紙にプリントアウト)をiPadの左側に提示し、その漢字を指によってiPad上のアプリに書字してもらった。このアプリでは、文字書き込むと文字認識をし、画面上部に書字された文字候補が複数表示された。書字に使用した漢字は、対象児の学年より1学年下の漢字を用いた。ベースラインを含めて各指導期における毎回の指導では、10画以内2、15画以内2、20画以内1の計5つの漢字を用いた。なお使用する漢字は毎回の指導で変更した。
- 4. 指導手続き(1)ベースライン**：漢字書字への振り返りの指導を行う前に、対象児がどの程度正しく丁寧に漢字を書くことができるかを確認した。対象児が書いた漢字に対してアプリが示した認識候補漢字のなかに自分が書いた漢字が存在しているか、対象児自身が認識できるかを確認した。**(2)指導期**：指導期全般を通して、書字した漢字が正しく書けているかの判断と、その要因への振り返りを行った。**指導期1**：書字した漢字が上手に書けたかどうかについて判断してもらうとともに、その判断に対して「それは

- どうして？」と質問し、その要因を振り返ってもらった。**指導期2**：目標とする文字「見本と同じ形」やその書き方「何回も見比べて書く」を設定し、漢字書字前に対象児に確認をした。書字後、上手に書けたかどうかについて振り返り・判断してもらうとともに、判断に対して「それはどうして？」と質問し、その要因を振り返ってもらった。**指導期3**：対象児に対して紙に記載した目標とする「文字」「書き方」の基準を漢字書字前に提示し、指導者が口頭で読み上げ確認した。また、漢字書字後には目標が記載された紙をチェック項目として用いながら、書字した漢字が上手に書けたかどうか判断してもらうとともに、その要因を振り返ってもらった。**指導期4**：指導期3の手続きに加え、書字した漢字が上手に書けたかどうか判断や振り返った要因が指導者の判断と一致した場合には、その判断を賞賛し、一致しなかった場合には、指導者の判断や要因を対象児に伝えることによって対象児の判断・振り返りを修正した。**5. 分析方法**：書字した漢字が画数、形、バランスを含めて正しく丁寧に書字できたかどうかについて、指導者の視点で「整った文字」「認識できる文字」「読むことはできる文字」「誤字」の4段階で評価した。また、書字した文字の要因に関する振り返りに対しては、対象児の振り返りが指導者の判断と「一致する」「やや合う」「少し異なる」「異なる」の4段階で評価した。

なお、本研究実施にあたっては、通級指導教室設置校校長の許可を得るとともに、本人・保護者に研究の目的・手続きを説明したうえで研究参加の同意を得た。

III 結果 図1に各指導期における整った文字数を示した。また図2に書字した漢字への要因を振り返った結果を示した。書字した漢字への要因を振り返ることでは、指導期1、2では要因を異なって振り返ることがあったが、指導期4では指導者の判断と一致する振り返りが可能となることが見られた。しかし、整った文字数には指導期が進んでも大きな変化が見られなかった。

IV 考察 漢字書字要因への振り返り結果では指導期4において適切な振り返りが増加したことより、行動の要因を振り返るには行動の結果への評価だけではなく、①明確な達成目標、②目標に向けた手順や方法が示され、③それら達成目標や手順・方法に照らし合わせた振り返り機会の

設定と④適切な振り返りのための振り返りへの修正が必要であることが推測された。しかし、適切な振り返りから行動改善へつながるため行動そのものを客観視することを検討することが課題として残された。
(SHIMODA Hironobu, HONMA Kenichi)

